

成人看護学(慢性期実践方法)における 外来看護教授法確立に向けた取り組み

—臨地実習における外来実習を見据えて—

松本 文奈¹⁾ 高橋奈津子¹⁾ 高田 幸江¹⁾ 林 直子¹⁾

Establishing an Outpatient Care Instruction Method in Adult Nursing (Chronic Illness and Conditions) —Preparing for Outpatient Care—

Ayana MATSUMOTO, MSN, RN¹⁾ Natsuko TAKAHASHI, MSN, RN¹⁾
Yukie TAKADA, PhD, RN¹⁾ Naoko HAYASHI, PhD, RN¹⁾

[Abstract]

Based on recent changes in the medical environment, which include reduced lengths of stay in the hospital and an increasing transition toward outpatient treatment, there has been a growing need for outpatient care. To address this need, since the 2013 academic year, we have conducted clinical trainings: a combination of one-week ward care and one-week outpatient care in adult nursing practice (chronic illness and conditions). For effective student learning on how to perform outpatient care, establishing an outpatient care instruction method systemizing adult nursing (Chronic Illness and Conditions), which is a prerequisite for outpatient care, was necessary.

We investigated student viewpoints regarding the learning of outpatient care, including the establishment of “a viewpoint focusing on features of outpatient medicine and nursing,” “a viewpoint focusing on nursing problems with outpatients who are highly reliant on medical treatment,” and “a viewpoint linking outpatient care with theory related to adult nursing (Chronic Illness and Conditions).” With focus on these viewpoints, we formulated outpatient care lecture contents and developed simulation-learning materials. We systemized these with outpatient care and gained insight into systematic instruction methods that allow for effective student learning regarding outpatient care.

[Key words] adult nursing (chronic illness and conditions),
adult nursing practice (chronic illness and conditions), outpatient care,
outpatient care instruction method

[要 旨]

在院日数の短縮化や治療の外来移行などの近年の医療情勢の変化を踏まえ、外来における看護提供の必要性が高まっている。成人看護学実習(慢性期)では、2013年度から病棟実習1週間、外来実習1週間を組み合わせた臨地実習を行っている。学生が外来看護を効果的に学ぶためには、実習の前提科目となる成人看護学(慢性期実践方法)と外来実習を体系化した外来看護教授法の確立が必要であった。

学生が習得する視点として、〈外来医療および外来看護の特徴を捉える視点〉〈外来通院する医療依存度の高い患者の看護問題を捉える視点〉〈外来の看護実践を慢性期看護に関連する理論と結びつけて捉える視点〉を設定した。この視点を中心に、外来看護の講義内容を構成し、併せてシミュレーション演習の開

発を行った。更に、外来実習との体系化に取り組み、学生が効果的に外来看護を習得するための体系的な教授方法の方向性を得た。

〔キーワード〕 成人看護学（慢性期実践方法）、成人看護学実習（慢性期）、外来看護実習、外来看護教授法

I. はじめに

慢性疾患を抱える患者を取り巻く療養環境の変化に伴い、病院外来の機能は大きな転換期を迎えている。慢性疾患患者の増加や外来医療の進歩を背景に、外来には医療依存度の高い通院患者が増加し、そこで働く医療者には、治療の継続と生活の両立を支援する役割が求められるようになった。外来看護師には、慢性・長期的な健康問題を持つ患者が治療を継続できるようなセルフケア支援や、生活を再構築するための心理社会的支援への期待が寄せられている。

我々は、これから慢性期看護を学ぶ学生がこうした変化に対応できる実践力をつけるためには、看護基礎教育の段階から外来看護の視点を育むことが重要と考え、2013年度より病棟1週間、外来1週間を組み合わせた臨地実習を開始している。

1週間の外来実習で、学生が療養支援を中心とした看護展開までを効果的に学ぶためには、その前提科目となる成人看護学（慢性期実践方法）から体系的に外来看護が学べるような教育方法の開発を行う必要があった。本稿では、臨地実習における効果的な外来実習を見据えて2015年度から開始した、成人看護学（慢性期実践方法）での外来看護の講義と演習、および外来実習を体系化した、外来看護教授法の確立に向けた取り組みについて報告する。

II. 成人看護学（慢性期実践方法）で教授する外来看護を選定するための手順の検討

成人看護学（慢性期実践方法）（以下、本科目と略す）の学習目標（表1）を達成するうえで、学生は外来という療養支援の場が、慢性・長期的な健康問題を持つ患者と家族にとって、どのような役割を担っているかを理解する必要がある。2013年度より先駆的に外来実習を開始するにあたり、慢性期看護に係る外来が担う役割については、本科目の概論の中で講義していた。

しかし、外来で行われている看護や役割は幅広く、多様な業務が混在している実態がある¹⁾。限られた実習日程の中で、成人看護学実習（慢性期）の実習目標（表2）を達成するためには、本科目において、外来実習を見据えた、外来看護の教授内容と方法の選定を検討する必要

があった。

外来で行われている看護のどの部分が学生にとって適切な学習内容となるのか、事前学習をどう組み立てることで学生の学びがより促進されるのかを検討する必要がある。このため、まず外来で行われている一般的な看護を先行文献から整理し、併せて、臨地実習を行っている同法人病院の外来部署において、外来実習の目標達成のために学生が参加可能な実習場面を確認することとした。

次に、慢性疾患患者を支えるために、本科目で習得を目指す外来看護の視点、およびその講義内容と方法を再検討し、成人看護学（慢性期実践方法）と成人看護学実習（慢性期）を体系化した外来看護の教授方法の確立を目指すこととした。

III. 成人看護学（慢性期実践方法）で習得を目指す外来看護の視点について

1. 外来で行われている一般的な看護と実習環境の確認

外来で勤務する看護師が実践している主な業務については、診療介助、環境整備、受付事務、カルテ整理、他部署や事務職との連絡調整、点滴処置検査準備、患者指導、療養相談、全身状態観察や援助、患者の申し送りやカンファレンスなどの実態¹⁾が明らかになっている。

看護師は、受付業務、診療準備、診療介助、他部門や他職種との連絡などの業務を多く担っている。これらの業務は従来、外来看護師が担ってきた外来業務の中心であるが、一人ひとりの患者のその日の外来診療が円滑に進むための看護といえ、これらを〈診療の補助に関する看護〉として整理した。

一方で外来医療の進展により、治療に関わる療養上の相談指導業務も、重要な看護として実施されている現状があった。通常、看護師は診療科ごとに区切られたセクションに配属され、専任または複数部署を兼任し勤務している。配属部署により、要求される高度な専門知識は異なるが、どの外来においても患者が治療やセルフケアを継続するために看護師が療養支援を行っており、これらを〈治療や療養支援に関する看護〉として整理した。

次に、臨地実習を行っている同法人病院の外来部署において、外来実習の目標達成のために学生が参加可能な実習場面を確認した。抗がん剤・放射線治療とそれに伴う療養支援や、糖尿病療養指導、心臓リハビリテーショ

表1 成人看護学(慢性期実践方法)の学習目標および到達目標

学習目標	慢性・長期的な健康問題をもつ人・家族がセルフケア能力を高め、生活の変化と療養のバランスを保ちながら、その人にとって最適な健康状態になるような看護に関連する理論と方法を習得する。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・慢性・長期的な健康問題をもつ人・家族について、病をもちながら生きていくという生活や人生のありようの特徴を説明できる ・慢性期にある人の治療の特徴を理解し、生活への影響を述べることができる ・慢性・長期的な健康問題をもつ人・家族が生活の変化と療養のバランスを取りながら生活するためのセルフケアを維持・促進する看護を具体的に述べるができる ・ある特定の慢性・長期的な健康問題をもつ人・家族において、ライフサイクル上の背景、疾病・障害・治療の特徴、病をもちながら生きる人の生活のありよう、生きていくことの意味などを踏まえて、その過程を支える看護を立案することができる ・慢性期にある人の療養環境の変化を知り、外来、在宅療養での長期的な視点での看護支援のあり方、意思決定を支える看護、倫理的課題などについて考え、討議することができる

表2 成人看護学実習(慢性期)の学習目標および到達目標

学習目標	慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族が、病と共に生きることの認識と対処法を習得し、療養の場の特徴を踏まえて自らの生活を調整・再構築する過程を支えるための援助を学ぶ。
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族に現在生じている身体的・心理社会的な健康問題や強みを統合的に把握でき、対応した援助ができる 2) 病態生理・治療の特徴を踏まえ、慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族に今後予測される健康問題を把握でき、対応した援助ができる 3) 慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族が病とともにどのように生活しているのかを説明でき、患者とその家族が病とともに生活していく過程を援助できる 4) 慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族の健康状態及びQOLの維持・向上について説明でき、援助できる 5) 慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族の個別性や強みを考慮した看護を実践できる 6) 慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族の特性や状況を踏まえて、安全・安楽を考慮した実践ができる 7) 慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族が病とともに生きていく上で必要な職種及びチームについて説明でき、自ら考えた看護を表明し、必要な支援を求めることができる 8) 看護実践に必要な情報を収集し、根拠を踏まえ、看護を立案・実施・評価することができる 9) 患者とその家族に誠実に向き合い、人としての尊厳を重んじる態度をとることができる 10) 実習全体を通して真摯で責任ある態度で実習できる 11) 看護実践を振り返り、慢性期看護に対する自分の考えを述べるができる

ン指導など、各部署の専門性により設定される実習場面はさまざまであるが、外来実習において、どの部署においても学生が〈診療の補助に関する看護〉のみならず、〈治療や療養支援に関する看護〉を学ぶための場面が豊富にあることが確認できた。

2. 成人看護学(慢性期実践方法)で習得を目指す外来看護の視点

外来という療養の場から、慢性・長期的な健康問題を持つ患者と家族を支援するにあたり、看護基礎教育の段階で習得を目指す視点を検討し、3つを設定した。

1) 視点1 〈外来医療および外来看護の特徴を捉える視点〉

学生が外来看護を学ぶうえで、〈診療の補助に関する看護〉は、学生自身が外来患者として病院を受診した経験を一度は持っていることを前提とすると、想起しやすいものと考えられる。しかし、2014年度の臨地実習後の学生アンケートに、「外来に行くまで外来看護師は受付をしている人だと思っていた」というような感想もあり、〈治療や療養支援に関する看護〉の学生の認知度は高くないことがうかがえた。

外来で行われる〈治療や療養支援に関する看護〉は、看護師の役割として今後ますます重要となることから、

看護基礎教育の段階でその重要性を理解することが望まれる。病棟実習と同等に外来実習においても、学生自身がセルフケア支援や患者教育を立案し、実践する力を強化するためには、「外来は何をやる場所なのか」「今外来で求められている医療や看護はどのようなものなのか」を、本科目の講義の中で概説し、進化する外来医療や、療養支援の場として重要性を増している外来のありよう、看護師に求められている〈治療や療養支援に関する看護〉の役割を、丁寧に教授する必要があると考えた。

以上から、外来医療および外来看護の特徴を学生が学ぶ視点1として設定した。

2) 視点2 〈外来通院する医療依存度の高い患者の看護問題を捉える視点〉

外来で治療を継続する患者像を捉えることを目的の一つとして、他の大学でも外来看護体験実習を導入する成人看護学実習^{2) 3)}が増えつつある。これは、外来医療の進展により、以前は病棟に入院して行われていたような侵襲性の高い治療が外来で行われるようになったことや、在院日数の短縮化から、病名告知を受けて病の受容過程にある患者や治療選択を迫られている患者への心理的サポート、自己管理能力が確立していない患者への療養支援や患者教育といった、医療依存度の高い患者への看護が外来で行われる場面が多くなったため⁴⁾である。

医療依存度の高い通院患者は、病とともに生きる長い経過の中にあり、潜在的・顕在的問題を常に抱えている存在である。学生がその看護問題に気付く、外来実習で看護を実践するためには、本科目の講義の段階で、外来通院する医療依存度の高い患者の特徴を理解した上で、その看護問題を捉えることができることが必要であると考えた。

同法人病院の外来部署で実施している外来実習において、学生が医療依存度の高い通院患者に関わる場面を学ぶ環境があることは確認できた。これらを踏まえ、本科目の講義の中で、医療依存度の高い患者とはどのような患者を指すのか、今の外来にはどのような病態の患者が通院しているのかをイメージでき、その看護問題に気付くことが重要と考え、視点2として設定した。

3) 視点3〈外来の看護実践を慢性期看護に関連する理論と結びつけて捉える視点〉

本科目では、慢性期看護概論の中で、慢性疾患患者を支えるための看護に関連する様々な理論を学生に教授している。成人看護学実習（慢性期）では、実習での看護実践の根拠と理論の関連性を、学生が考察できることを目標としている。そのため、外来実習では、病棟実習と同じ看護過程に基づいた記録用紙を用いて、外来看護も看護過程に基づく看護実践であり、理論に基づくことを指導していた。一方で、患者の滞在時間が短い外来実習では、看護師が何を意図して患者に関わっているのか、どのような看護が提供されているのかについて、初学者である学生にとって学び取ることが難しい状況があることも推察された。

外来での看護実践も理論と結びつくという、学生の考察が促進されるためには、本科目で理論を教授する段階において、外来看護も理論に基づいた専門的な看護実践であることをより強調しておく必要があると考えた。外来での看護実践が理論に基づいているという視点を持つておくことで、学生は外来看護師の看護実践の背景にある理論を想起しやすくなり、更に、学生自身の看護計画の根拠に理論を活用する必要性が認識しやすくなると考え、これを視点3に設定した。

IV. 成人看護学（慢性期実践方法）と成人看護学実習（慢性期）の体系的な教育方法

1. 成人看護学（慢性期実践方法）での講義の位置づけと講義内容の決定

「外来看護」が慢性期看護の中で重要性を増している現状を学生へ強調することを意図し、慢性期看護概論に「外来看護と退院調整」をテーマにした1単元を位置づけた。また、3つの視点を習得するために教授内容を検討し、講義目標と講義構成を設定した（表3）。

視点1〈外来医療および外来看護の特徴を捉える視点〉の教授にむけ、講義のはじめに、「外来は何をすところだろう?」という発問を行い、学生が外来医療や外来看護を自身の経験から想起する機会を設けることとした。その上で、外来には、学生自身が経験から認知しやすい〈診療の補助に関する看護〉（図1）と、療養相談指導といった、学生自身の認知しにくい〈治療や療養支援に関する看護〉（図2）があることを明示した。この根拠として、「1. 慢性疾患を有する患者を取り巻く療養環境の特徴」（表3参照）に関する内容を提示した。

視点2〈外来通院する医療依存度の高い患者の看護問題を捉える視点〉は、「2. 外来医療および外来で提供されている看護の概要」（表3参照）の中で、外来に通院する患者の特徴を概説することとした。どのような経過をたどっている患者が外来通院をしているのか、学生にわかりやすく説明するために、看護における経過⁵⁾を用いて、外来通院する医療依存度の高い患者の具体例（治療に関する意思決定を必要とする患者・化学療法・放射線療法・輸血療法を受ける患者・退院直後で自己管理能力が確立していない患者・器具や装具を用いた医療処置の管理が必要な患者など⁶⁾）を説明することとした。

このような医療依存度の高い患者のために、〈治療や療養支援に関する看護〉を実践するためには、患者が抱える潜在的・顕在的問題に介入する看護が求められていることに加え、外来での専門的看護や看護外来が発展している現状、継続看護の観点、地域連携等を教授することとした。また、イメージ化を促進する目的で外来実習する各部署の処置室や治療の様子、看護外来などの写真を用意し、外来看護の風景を映写することとした。


視点3〈外来の看護実践を慢性期看護に関連する理論と結びつけて捉える視点〉については、「3. 慢性疾患を有する人とその家族に対する支援を、入院から地域へと切れ目なく行うための看護」（表3参照）が外来看護の役割の1つであることを伝え、医療依存度の高い通院患者への〈治療や療養支援に関する看護〉を実践するうえでは、理論に基づいた看護実践が求められることを強調することとした。切れ目のない看護を実現するために、看護実践を記録し看護をつなげることは重要⁷⁾とされている。外来実習でも、病棟実習と同様に看護過程を展開する意義を学生に感じてもらうためにも、記録の重要性について説明を加えることとした。

また、外来医療の進展に伴い、これから外来看護が担う役割について、学生自身で考察を深められることを意図し、講義の最後に、「4. これからの外来医療の流れと診療報酬」（表3参照）の内容（図3）を設けることとした。

表3 2016年度 成人看護学（慢性期実践方法）概論 (3) 「外来看護, 退院調整」の単元目標と構成

単元目標		
1. 慢性疾患を有する患者を取り巻く療養環境の特徴および国の施策を理解する。 2. 外来医療および外来で提供されている看護の概要を理解する。 3. 慢性疾患を有する人とその家族に対する支援を, 入院から地域へと切れ目なく行うための外来看護, 療養支援 (退院支援) について理解する。 4. これからの外来医療の流れと診療報酬について理解する。		
構成		
大項目	小項目	内容と方法
1. 慢性疾患を有する患者を取り巻く療養環境の特徴	1) 慢性疾患患者の動向	疾病構造の変化, 高齢化による慢性疾患患者の増加, 慢性疾患の受療率の増加など
	2) 療養環境の変化	医療技術の進歩, 患者ニーズの多様化など
	3) 社会情勢の変化	国民医療費の推移, 治療・療養の場が変化など
	慢性疾患における施策の推進について	生活習慣病対策, がん対策, 難病対策など
2. 外来医療および外来で提供されている看護の概要	1) 外来医療の現状	医療依存度の高い通院患者について
	2) 地域連携の推進	地域完結型医療の中の病院外来看護の役割
	3) 外来で提供されている看護の特徴	外来看護の発展, 外来での専門的看護の実際, 看護外来など
	聖路加国際病院で行われている外来医療	写真を映写。治療場面や設備, 外来風景, 看護外来を紹介
3. 慢性疾患を有する人とその家族に対する支援を, 入院から地域へと切れ目なく行うための看護	1) 外来での療養支援の目標	専門的看護, 継続看護, 外来看護記録など
	2) 退院支援活動, 地域の医療・福祉サービスとの連携	退院支援, 退院調整看護師, 慢性疾患を有する人に関わる専門職とチーム医療, 慢性疾患患者が活用できる社会資源の活用など
4. これからの外来医療の流れと診療報酬	1) 外来医療の機能分化と連携	これからの外来医療に係る議論について (H25.1.23中央社会保険医療協議会総会資料より)
	2) 外来看護の発展とそれに関わる診療報酬	外来看護にかかわる診療報酬評価の推移と背景
	3) 外来看護の展望	

外来は何をするところだろう？



- ① 問診
- ② 検査
- ③ 診察
- ④ 治療・処置

図1 外来は何をするところだろう？ (1)
(2016講義資料より)

外来は何をするところだろう？

- ⑤ 治療を効果的に行うための(指導)や療養生活のための各種(相談)対応
- ⑥ 地域の保健福祉医療関係者との連絡・調整, 入院のための連絡・調整
- ⑦ その他:健康診断、予防接種など

図2 外来は何をするところだろう？ (2)
(2016講義資料より)

2. 成人看護学（慢性期実践方法）の演習と成人看護学実習（慢性期）における外来実習との体系的な教授方法の決定

本科目ではこれまで, 糖尿病患者に関する事例を用いた慢性・長期的な健康問題を持つ患者の演習を実施してきた。今回, 講義, 演習, 実習の体系的な外来看護教授法を検討するにあたり, 演習内容を一部再構成することとした。演習1は従来通り糖尿病患者への病棟での事例

演習とするが, 同事例の10年後を設定した演習2を追加し, 学生が外来での教育的支援を行うロールプレイを導入することとした。外来看護講義と演習の体系化により, 長い経過をたどる患者に対し, 外来という療養支援の場から, 〈治療や療養支援に関する看護〉の習得を目指すこととした。なお, 本シミュレーション演習開発の詳細については, 高橋の報告⁹⁾を参照されたい。

本科目での外来看護の講義内容は, 外来実習での学び



図3 これからの外来医療の流れ
 (2016講義資料より 文献8) より引用)

の促進を見据え、習得を目指す視点を中心に講義内容を構成した。外来看護の講義と外来実習の体系化から、外来実習で出会う看護の対象者や看護の特徴を学生が想定できる状況を整えた。また、シミュレーション演習の体験を踏まえ、学生が外来実習の中で、〈治療や療養支援に関する看護〉の実践ができるレディネスも整え、今回の取り組みにより、学生が効果的に外来看護を習得するための体系的な教授方法の方向性を得ることができた。

なお、学生の学びの更なる深化を目指し、学生個々のレディネスに合わせた各部門の臨床指導者との指導体制の連携強化に向けた取り組みも、並行して実施している。この取り組みの詳細については高田の報告¹⁰⁾を参照されたい。

V. まとめ

これから慢性期看護を学ぶ学生が、外来で求められる看護の役割を理解し実践力をつけるために、成人看護学（慢性期実践方法）と成人看護学実習（慢性期）を体系化した、外来看護の教授法の確立に向けた取り組みについて報告した。

外来看護の講義と新たな演習を導入し、今年で2年目となるが、外来看護の講義後の感想では、学生から、「外来実習が楽しみ」「外来に焦点を当てた講義を受けたのは初めてで、イメージがついた」という意見が散見されている。また、外来実習後には「外来に看護があることがわかった」「療養支援の場は違っても、看護の基本は同じだと感じた」等、外来での看護が看護の専門性に基いて実践されていることを認識できたような感想も語られ

ており、今回報告した外来看護教授の取り組みが学生の学びの促進に寄与している感触を得ている。

看護基礎教育において意識的に外来看護を教授する取り組みは、未だ始まったばかりであるが、慢性期看護における外来看護の役割はさらに進展することが予測され¹¹⁾、学生が看護基礎教育の段階で外来実習を経験する意義は大きい。今後は外来看護教授による学生の反応を確認しながら、この取り組みの学習効果を確認する機会も視野に入れ、次年度の教授法や教授内容への反映を検討していきたい。

引用文献

- 1) 武知幸子. 外来看護を見える化する業務量調査. 継続看護時代の外来看護. 2015; 20(2): 128.
- 2) 柴田和恵. 成人看護学臨地実習における外来看護体験実習での学び. 天使大学紀要. 2015; 15(2): 41-53.
- 3) 長瀬雅子. 慢性的な疾患・状態を抱える成人患者を対象とした看護学実習における体験型実習の意義. 医療看護研究; 2011; 8(1): 1-7.
- 4) 数間恵子. 慢性期看護 外来看護を中心として. インターナショナルナーシングレビュー. 2007; 30(3): 50.
- 5) 川島みどり, 菱沼典子監修. 経過別看護. (臨床看護学叢書; 2). メジカルフレンド社; 2011.
- 6) 外来における看護の専門性の発揮に向けた課題 H22年度 日本看護協会業務委員会.
<http://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/fukyukeihatsu/gairaikango0731.pdf>
- 7) 高橋弘枝. 継続看護 外来記録の書き方. 日総研. 2014.
- 8) 外来医療. 中央社会保険医療協議会総会資料 [H25.1.23].
<http://www.mhlw.go.jp/file.jsp?id=146821&name=2r9852000002sfb5.pdf>
- 9) 高橋奈津子. 成人看護学（慢性期実践方法）におけるシミュレーション教育の取り組み. 聖路加国際大学紀要. 2016; 2: 68-71.
- 10) 高田幸江. 病棟実習と外来実習を組み合わせた成人看護学実習（慢性期）における指導体制強化に向けた取り組み. 聖路加国際大学紀要. 2015; 1: 40-45.
- 11) 数間恵子, 小林康司. 変わりつつある外来看護へのニーズ 在院日数短縮化によるケア必要量の増加とニーズの多様化. インターナショナルナーシングレビュー. 2005; 28(1): 34.